特245
466

文學博士
醫學博士
富士川 游先生講演

宗教講話

三和佛教會

三和佛教會講演第二輯
（以印刷代謄寫）

始

特245
466

宗教講話

文學博士
醫學博士
富士川　游先生講演

第一席

先般私にこの會に罷り出でゝ何か宗教の話をする樣にとのことでありましたので、承諾致しましたのでありますが、折惡しく私が病氣を致しました爲め今日迄延び、殊に私の都合で日取りなし時間を選びましたので、定めし御迷惑であつたことゝ考へます。止むを得ないことでありまして、お斷りを致します。

○宗教の本質

宗教の本質と申しませうか、宗教とは一体どういふものであるかと申すことを、先づお話致して置かなければ、これからお話をすることがお分りにくいかと思ひますから、そのことを第

一にザツト申上げ度いと存じます。

今日、世間で宗教と申しますと、直ぐに組織的の宗教のことが考へられるのであります。しかしそれは宗教の形式に屬するもので、宗教の本質ではないのであります。宗教とはこれを一口に申せば、銘々が生れながらに持つて居る心のはたらき――自からにして心の底に存在して居る一種特別の精神現象を指すのであります。

この精神現象が本となりて、それが智識の方面に移され、言葉をもつて人から人に傳へるやうになりまして、そこに組織的宗教が起るのであります。たとへば、寺院の制度であるとか、或は教會の制度であるとか、或はお經を讀むとか、說教をするとか、神や佛を禮拜する儀式とかといふものがあらはれて來るのであります。元來宗教の本質は、精神現象の中でも感情の領域に屬するものでありまして、心から心に傳はるべきでありますが、それが智慧の方面にあらはれるときに、卽ち、組織的宗教となるのであります。

○感情と概念

申すまでもなく、我々の言葉は概念を言ひあらはすものであります。例へば痛いといふのは感情でありますが、この痛いと名づけられる感情をば言葉の上に現はして、人から人に傳へる

ために概念を造るのが我々の心のはたらきの一とつであります、ところが、痛いといふことを概念にて言ひあらはすときに、甲の人の痛いといふのと乙の人の痛いといふのとはたとひ、その言葉に現はれた概念は同一でありましても、その痛みの性質及び程度などが各人、相異であることは勿論であります。從つて、自分が痛いといふ感情をもつて居つて、たゞ同じ言葉であるといふので、他人の痛いといふ感情と同樣であると推定することは出來ぬのであります。

今一つ申上げますと、櫻の花を見た時に、綺麗だ、美しいと云ふ心持が起る。それが感情でありますが、この綺麗だといふ感情を言葉に出して言ひあらはせば、それは最早智慧のはたらきに移つたのであります。綺麗といふ概念が出來たので感情そのものではありませぬ。それ故に、概念を概念として傳へ、その內に含蓄する心持を十分よく會得することが出來なければ、そこに大なる間違があらはれるのが常であります。言ふまでもなく、智慧の優れた人の言葉と智慧の淺い人の言葉とは相違して居ります。又物ごとを細かく考へる人の言葉と大ざつぱに考へる人の言葉とは同じやうでありませぬから、言葉通りに、概念の儘に取扱へば、誤謬に陷ることは當然であります。

○組織的宗教

そこで前に申した組織的宗教は宗教の心持を概念の上で取扱つたものでありますから、甲の派の教と、乙の派の教とが相違して、お互に對立して、爭論をしなければならないやうになるのであります。宗教の本質は左樣な爭論をすべき性質のものでは無く、それが智慧のはたらきを離れたものでありますから意見の相違などがあらはれて來るべきものではないのであります しかるに宗教が言葉によつて傳へられ、或は書物に書かれ、或は教義として傳へられる場合、それは全く人間の智慧のはたらきによるのでありますから、所說に差異を生じ、それによりて爭論が行はれるのであります。

私がこれからお話を致さうと思ひますのは、さういふ組織的宗教のことで無く、我々人間が銘々に持つて居るところの、精神の作用としての宗教に就てお話をするのであります。或は初めて話をお聽き下さる方には、込入つた難しい話の樣に考へられることもありませうが、決してそういふ六ケ敷い話を申すのではありませぬ。

○文化の一要素たる宗教

宗教といふものは、我々が生れつき持つて居るところの精神現象であることは先程も申しましたが、元來、科學哲學藝術及び宗教の四つは人間の文化(Cultur)の要素と申されるものでありまして、原始時代から已にあらはれて居るものであります。その他のものは文明開化(Civilization)と申しまして、例へば法律や經濟の如き、人間の文化が一定の度まで進んでから後にあらはれるものであります。文化といふ言葉は獨逸語のクルツールから出たもので培養するといふ意味であります。百姓が田畑を耕やして苗を生長せしむるが如く、心の中に持つて居る芽を培ひてだん〳〵成長させてゆくことを意味するのであります。この文化によつて、人間は他の動物と離れて、然も他の動物が爲し得ないところのものを爲し、所謂人間生活をすることが出來るのであります。宗教はこの人間生活に於ける一つの重要なる要素でありまして、人間生活からして宗教を除くことは絶對に出來ないことであります。

○宗教上の概念

宗教の本質は一種特別の感情に存するものでありますが、それが智慧の方面にあらはれて、

所謂組織的宗教になりますと、主に概念の上で、それが取扱はれますためにいろ〳〵に批難され、又議論せられるのであります。宗教は道德を麻痺せしめるものである、阿片であるといふやうなことを說く人がありますが、組織的宗教の實際に於ては確かにさういふことも考へられるのであります。說きやうによりては、我々の良心を痲醉させるものだと云ひ得ることもあると思ふのであります。世の中の多くの人の中には、自分は宗教などを必要としない、宗教が無くとも日々の生活に、少しも差支へ無いと云ふ風に考へる方もあるやうでありますが、それは組織的宗教を見ての話でありまして、宗教の本質の何たるかをよく考へずに申して居られるのであります。今日の組織的宗教に於ける寺院とか、お經とか坊さん等が、我々生活に何等必要なる存在で無いと考へることは、無理の無いことであります。これ等の形式は人間の智慧のはたらきによつて現れたものでありますから、必要に應じては教義を改革することが出來ます。又寺院の樣式なども自由に改造することも出來ます。或は坊さんの形式も改革することも出來るのであります。總て人間の智慧のはたらきによつて造られたものでありますから、同じく智慧によつて改造することが出來るのであります。しかしながら我々の心の中に自から起るところの精神現象――文化の一要素として自然に起るところの宗教は、これを如何ともすることも出來ぬのであります。尙ほ一言申上げて置き度いことは、宗教は人間の智慧を全然離れたる心

のはたらきでありますから、宗教のことの話に於て先づ此點に注意しなければならぬといふことであります。言葉に現はれたる概念に捉れ、そこに含まれて居る心のはたらきを理解しないならば、必ず大きな間違が生ずるのであります。たとへば昔、釋尊が說かれた教は金言として絕對動かすことの出來ない樣に考へられますが――勿論金言其ものの精神は動かすことは出來ないのでありますが、概念に現はれて居る內容は時代によりて、昔と今と違ふのは當然であります。例を上げて申せば、釋尊の當時に燈明と申されたことは、油に火をつけた光のことでありましたと思ひます。しかし、今日の燈明には必ず油を使はなければならないのではありませぬ。當時は油以外に用いる燃料が無かつたのでありませうが、今日では電氣を用ひ、アセチリン瓦斯なども用ひられるのでありますから、燈明といふ言葉の內には電氣や瓦斯なども含まれて居るのであります。

○信條を排斥す

當時盛んに行はれて居つた婆羅門の教と云ふのは、所謂哲學を本としていろ〳〵なことを教へたのでありますが、其教を奉じて居る、カーバ、チーカーと云ふ若い者が、或時釋尊に向つて私が今迄勉强しました婆羅門の教では「ウエーダー」と云ふ古い教の本があつて、それを絕對

の眞理として奉じて居ります、さうして其他の教は間違つた教だと考へますが如何でせうかと尋ねたのであります。さうすると釋尊はその教が絶對に正しい眞理を説いたものであるといふことを説くものがあるかと反問されました。否それはありませんと答へました。すると釋尊は更に、一体お前の師匠は誰といふ名前の人であつたかと訊かれますと、それは誰ですと答へました。更に其師匠は誰か、又其師匠は誰かと次々に前々の師匠の名を訊かれますと、そんなに古いことは分りませぬと申したのであります。釋尊はさうか、お前の信じて居る教は恰も盲人が手をつないで居る樣なものである、成程手と手は互につなぎ合つて居るが、誰の手とつないで居るのか分らない、さう云ふものを絶對の眞理として考へることが出來るか、總て一つの信條によりて、それを信ずることは眞の教ではない、眞の教は自ら眞理を認めてゆかねばならぬ、それ故に一生懸命努力して眞理を自らのものとしなければならないのであると、お諭しになつたのであります。又ある若者が、一体この世界はどうなるのでせうか、何時迄續くものでせうか說明して下さいと申しますと釋尊は、自分はお前にさう云ふことを說明すると約束をしたことがあるかと申されました。約束は申し上げませぬと答へましたので、釋尊はその若者に向ひ一体お前はさう云ふ問題を解決する爲めに自分のところへ來たのか、私は約束をせず、お前も約束をしない、何の爲めにさう云ふことを聞くのか、自分は中道を踏むことによつて、苦みか

ら免がるゝことを敎へて居るのであつて、世界がどう成らうが、そんなことは知らぬことである。たとへば若し毒矢が身体に刺さつて苦しんで居る場合に、其毒が何と云ふ毒か、又其矢が何と云ふ矢か一切分らなければ、矢を拔くことが出來ないと云ふことを考へるやうなものではないか。矢の詮議をしてから拔くと云ふことは、本當の教では無い、自分は說く可きことは說くが、說く可らざることは說かないのであると云つて、その若者に諭されたのであります。

又あるものが釋尊に向て、一体人間には魂があるのでせうか、有れば一つでせうか、違ふでせうかと云ふことを尋ねました。すると釋尊は、自分はさう云ふことは知らない、お前は、そんなことを知つて何にするのか、さう云ふことは苦みから離れる道とは、何等關係の無いことではないかと言つて、答へられなかつたのであります。斯云ふ樣に、教を受ける人の考が概念に捉はれ、理論に流るゝといふやうな場合には、釋尊は決して受付けられなかつたのであります。何故かと申しますと、若し概念的に說明をすれば、それを聞く人が、自分の心に合はなければ尙も之を詮議し、益々概念的に取扱はうと致しますから、結局眞實の宗教で無くなるからでありませう。

○他の教をも引用す

大体釋尊がその教へを説かれる態度はこの様でありますが、しかし、自分の發見された眞理を、其當時行はれて居つた他の宗教の教にだん〳〵ひき寄せて、勿論表面的ではありますが、取り入れられて居ります。例へば、地獄極樂の説なども當時婆羅門の人も申して居つたのを採て居られるのであります。ところが云はれる意味は全然違つて居るのであります。一例を擧ぐれば、ある金持の子で、某と云ふ若者が、朝早く起き、さうして着物をぬぎ、手を合はせて、東西南北、上下の六方を拜む所謂六方禮拜を教へられて始終それをやつて居りましたが、釋尊は之を見て、お前は何をして居るのか、何故さう云ふことをするのかとお尋ねになります、すると某は父の教によつて、家の財産を失はない様にする爲めに、斯うして六方を拜んで居るのですと答へました。釋尊は、眞實の教へでは、そんなことをして六方を拜むことはせぬ、と申されました。某は、それでは一体どう云ふ風にして拜めばよろしいのでせうかと聞きますと、釋尊が申されるのに、唯六つの方角を拜んで居つても仕方がない、それよりも六つの口を拜む様にすれば好いのだ、第一に酒を飲まぬこと、第二に時をはづして道を彷徨ひ歩くこと、第三に遊び廻らぬこと、第四に博打をうたぬこと、第五に惡友と交らぬこと、第六に怠らないこと

である。又六方と云ふことを、先づ東を父母、南を師匠、西を妻子、北を友達、下を下女下男上を釋迦菩薩と思つて禮拜せよと云ふ風に、當時の教にかこつけて自分の教を説かれて居るのであります。又ある時、マーガンディアと云ふ金持が大變に綺麗な娘を持つて居つて、釋尊に自分の娘をすゝめ様としたのであります。ところが釋尊は直ぐに斷られたのであります。お經に書いてあることに因つて見ますと、大便や小便を包んだ袋は要らないと言はれたさうであります。マーガンディアはひどく感心をして、貴方は實に偉い人だ、如何なる哲學を奉じて居られますかと尋ねました。釋尊はそれに對して、自分は如何なる哲學をも奉ぜぬと斷言せられたのであります。當時印度では、苟も宗教と云へば哲學を加味しないと、一般の人は聞かないので、どうしても哲學を根本としてやらなければならなかつたものであります。けれども釋尊は人物が如何にも大きかつた爲めでありませうか、哲學を拔きにしても、多くの人が教を聞きにやつてきたのであります。

釋尊の説かれた教は、少しも他の教と衝突をしないことが目に着くのであります。例へば、佛教に近い印度の宗教として耆那教と云ふものがあり、又當時相當盛んに行はれて居つた拜火教等もありましたが、釋尊はそれに對しても、少しも之を攻擊、反駁しないで、取る可きものがあればとつて自分の教として説かれたのであります。

○内觀の教

斯くの如く、釋尊は實際的で、さうして日常我々が當面する事柄をよく觀察して、哲學の加らない、又煩瑣な議論の加らない誰でもが其智識を持つて、認識の出來る樣なことを敎として說かれたのであります。それ故に全く哲學によらずして、全く自分の燈火にて自分の道を照すべき敎でありました。お經の中にて、その內容の最も古るいものゝ一とつとして、今に存するものに雜阿含經と云ふのがありますが、その中に次のやうな話があります。

○比丘と池の主の話

ある所の林の中に一人の比丘が居りました。ある時眼を病みまして醫者に診て貰つたところが、醫者の云ふには、これは蓮の花の香をかげば、外のことはしなくても直ぐ治ると云つたのであります。比丘は喜んで丁度自分の住んで居る附近に池があつて、蓮が咲いて居りましたから、其花の香をば風の吹くまゝ嗅いで居つたのであります。すると池の中に住んで居る主の神樣が大變に腹を立てまして、比丘に向つて、自分に一言の斷りもなく、何故蓮の香をかいで居るのか、お前は泥棒だと云つて怒つたのであります。さうすると比丘が云ひますには、自分は

何も池の蓮の葉を傷めるのでも無く、又盜るのでも無く、唯遠くで其香を嗅いで居るだけである。それがどうして泥棒でありますかと云ひますと、池の主の神樣は、否許を受けないで默つて香を嗅いで居るといふのが、本當の泥棒だ、吳れとも云はない、やらうとも云はないのに、默つて嗅いで居るお前が本當の泥棒だと言ひ合いをして居りますと、其間に一人の男がそつとやつて來て、池の中の蓮をむしり取り、根をもぎ取つて抱へて逃げて行つたのであります。ところが池の主の神樣はそれを泥棒と云つて咎め樣ともしないので、比丘は何故あの男を咎めないのかと、抗議を申込んだのであります。すると主の神樣は、黑い着物は汚れても人は左程にも思はないが、それに反して白い着物を着て居ると、汚れると直ぐに人の目にかゝるものである。今の男は惡人で黑い着物を着て居るけれども、お前は白い着物を着て居るから、直ぐに目につくのだと云つたのであります。それを聞いて比丘は常非に喜んで、いや大變有難いことを聞かして頂きました。私の爲めには良い善知識であるから、何時迄も私の爲めに、いろ〳〵貴い敎の言葉を聞かして下さいと賴んだのであります。池の主の神樣は、自分はお前の奴隷ではないから、何時でもお前の側に附いてお前を敎へることは出來ない、お前のことはお前が勝手にやるがよいと云つて、忽ち姿を隱くして了つたと云ふ話であります。これは無論釋尊の作くられた話でありませうが、かういふ話をすることによつて相手に對し、內觀することの法を敎へ

て居られるのであります。即ち、自分の心は常に自分で見てゆくことが大切だと云ふことを、教へる爲めに斯云ふ話をされたのだと思ひます。

又ある時、三十人程の人が釋尊の方へ向つて急いでかけて來たのであります。さうして釋尊に向つて、こゝを女が通りはしなかつたかと尋ねました。何故そんなことを尋ねるのかと訊かれますと、實は私共友達が三十人居りまして、二十九人は皆女房をもつて居りますが、一人だけ未だありませぬので可哀相だから皆で女房を周旋してやつたところが、其女は女賊で、皆の物を持つて逃げてしまつたので、我々は其女を探して居るのですと申しました。釋尊は、さうか、しかし、お前方は人の女房を尋ねるのと、自分の心を尋ねるのと、どちらが大切だと思ふかとお訊になると、それは自分の心を尋ねるのが大切ですと云ひました。そこで釋尊は三十人の者を前にして諄々と内觀の貴き法を說き聞かせられたのであります。

（昭和九年十月十三日講演）

第二席

先月、この席に於きまして、宗教に關するお話を致す前置として、宗教の本質、即ち宗教とは如何なるものであるかといふことを簡單に申上げ、尙ほその說明として、佛教としての釋尊の教がどういふものであるかといふことにつきて、少し許りお話して置きましたが、今日は佛教の本旨を徹底して理解する爲め、先づ釋尊の人柄、——人間としての釋尊のことをお話申上げて置かうと思ひます。

○釋尊の出家

釋尊の本名は喬答摩（ゴウタマ）と云ひまして、印度ヒマラヤ連峰の南にある迦毘羅城主、淨飯王の息子で悉達多（シッタルータ）太子と言はれたのであります。母は摩耶夫人と申す御方であります。年若くして結婚をされ、さうして羅喉羅（ラゴラ）といふ子供が一人出來たのであります。釋尊が齡二十九才の時宗教の心に動かされまして、遂に宮城を出られたのであります。さうして、當時印度で行はれて居りました哲學を主とせる所謂哲學的宗教であつた、婆羅門（バラモン）の教を聞く爲めに、その學者のところ

へ行つて、色々と教をお聞きになつたのでありますが、結局要領を得なかつたのであります。何故かと申しますと、婆羅門の教は哲學的でありまして思索を本とし、理窟としては誠に當然な事柄でありましても、實際的宗教として、安心立命を得るためには適切では無い教でありますと。たとへば非想と申して我々の思考を否定せねばならぬと說くのでありますが、この哲學によりますと、我々は心をもつて、色々のことを考へるから、そこに苦みと云ふものが生ずるのである。だから苦みより離れんとするには、どうしても思考を止めねばならない。ところが、思考を止め樣と考へることが又一つの思考であります。それで非想を更に否定する、卽ち非非想でなければならぬといふ風に、だん〳〵思考と云ふものを亡ぼし無くしてしまはなければ、我々は苦みより免がるゝことは出來ないと說くのであります。誠に尤もなことでありますが實際としては、我々が幾ら思考を無くしやうと努力しても、それにより安心立命を得るといふ宗教の狀態には成り得ないのであります。

○入山の釋尊

かやうに、釋尊は自分の心の苦を除く爲めに家を出て、學者について道を求められたが、それは一層苦を增すばかりで、少しも安心の道を得られなかつたのであります。そこで自分は苦

を免がれる方法を敎へて貰いに來たので、今の樣に尙苦が增す方法を訊きに來たのではないと云つて遂に其學者のところを去りて、さうして自分一人で山に入り、自ら苦行を修めて苦より離れ樣とされたのであります。苦行と云ふことは、當時婆羅門の敎を奉ずる人々の間で盛に行はれて居つたもので、もと〳〵我々の苦みは、身体の感覺から起るものであるから、苦行によつて身体を傷め、感覺を無くすることによつて、苦みの心が起らない樣にすることが實際的な方法だと考へて、つとめて苦行をしたのであります。卽ち食ふ物も食はず、着る物も着ないで、文字通り苦の行をすることをもつて、その方法として居つたのであります。釋尊は理論は駄目だ、實際的な修行によつて道を成就すべきだと考へて山の中へ入り、六年間も引き續きて苦行をせられたのであります。けれどもその結果は唯、身体が痩せ衰へることゝ、苦痛を增すことの二つを得たのみで、少しも安心立命の境に到る事が出來なかつたのであります。

○出山の釋尊

そこで釋尊は、これも駄目だ、斯んなことをして居つては、到底いつ迄經つても目的は達せられないと考へられて、山を出られました。出山の釋迦として畫かれたるものを見ると、骨と皮の姿が畫かれてあるほど非常に身体は衰へ、この上は如何ともすることが出來ない狀態で、

山を出られ、さうして尼連禪河の邊で水を浴び、それから其村に牛乳を配達して居る女の子が居つて　それから牛乳を貰つてそれを飲んで、衰へた身体の榮養を回復されたのであります。それから　提樹の下で靜かに禪定に入り、心靜かに考へられたのであります。ところが釋尊はこゝに於て、忽然と悟を開らかれたと云ふことであります。お經に書いてあるところに依ると誠に不思議だ、人間は誰人でも佛となることが出來るものだ、と叫ばれたといふことであります。當時の婆羅門の教では、一般の衆生が佛に成ることは出來ないので、佛に成るには、いろいろの條件があつて、誰でも佛に成ることは出來ないとされて居つたのであります。卽ち、第一に所謂三十二相と云ふものがあり、其三十二相を總て備へて居なければ、佛に成ることは出來ない。第二には、ある種族のものは佛に成ることは出來ないと云つて、人種族による區別制限をしたのであります。第三には、婦人は成佛出來ない者であると云ふ風に、成佛にも制限が附けられて居つたのであります。ところが釋尊は、誰人でも佛に成ることが出來るものであるといふことを悟られたので、これは實に不思議なことだと言はれたのでありませう。

釋尊が所謂成道を得られたのは、十二月八日の夜の引き明け時であると云ふ傳說でありまして、それに因んで臘八の日に成道會を行ふことは、我が邦の禪宗では今でも行はれて居る樣であります。

○最初の說教

扨て悟を開かれた後の釋尊が、それを人に說かうと考へられますまでには、色々な惡魔が現はれて、さう云ふ教を說いてはいけない、止めて置けと云つて妨げたといふやうな傳說もありますが、それは釋尊自から色々に考へられたことを云ふのでありませう。さうして結局、自分の得た眞理を多くの人に傳へることに、心を定められたのでありますが、差し當り誰に向つて說くべきかといふことが問題でありました。ところが釋尊が家を出られて後に山に這入いられた時に、其後を追つて來た者が五人あつて、一緒に釋尊と修行を始めたのであります。さうして六年の修行が何の役にも立たないで、全く徒勞であつたと悟られて、山を出でられた後もその五人のものは釋尊と離れてベナーレスの方へ行つたのであります。釋尊はその五人を思ひ出されまして、先づあの五人の者達に自分の教を說いてやらうと、鹿野苑に行かれたのであります。其五人の者は釋尊がやつて來られる姿を見て、向ふからゴータマがやつて來るぞ、あんな弱志薄行の者の云ふことは聞くべきでないと、お互に話をして居つたところが、だん〳〵釋尊が近づいて來られるに從つて、その威嚴に打たれ、反抗的な心が消え去り、遂にその教を聞かうと云ふことになつたのであります。釋尊はその五人の者に向つて、我々が道を求める爲めに

は、二つの極端を避けなければならない。卽ち、苦しい行をすることは極端であるからいけないし、又それと反對に榮耀榮華な生活をすることも、極端であるから避けなければならない。さうして、この二つの極端を離れて、眞ん中の道、卽ち中道を歩ゆんで行かねばならないと言つて說かれたのであります。すると、五人の者は深く感じ入りまして、どうかもう少し詳はしくお話を願ひたいと賴みましたので、釋尊は更に中道の講釋をされたのであります。佛敎の書物には、轉法輪としてありますが、法の輪を轉ばすこと、卽ち說法であります。さうしてそれが釋尊成道後第一回の說法でありました。

○ 對機說法

大体、釋尊の說法は一人一人を相手として說敎されたので、決して大勢の人を相手に說敎をされるといふことは無かつたのであります。彼の有名な靈鷲山に於いてされた大說敎の時も、聽衆は何千と居つたと書いてありますが、相手は阿難と云ふもので、その阿難に向つて說かれた說敎で、それを書いたものが所謂大無量壽經であります、元來、宗敎の心のはたらきから言つて、大勢の人を集めて講義をすべき性質のものではなく、各人に對して、夫々宗敎の心が起るやうに說くべきものであります。釋尊は相手の心持をちやんと見拔かれて、その心に應じて

宗敎の心が起るやう諄々と話をされたのであります。所謂對機說法と申すのでありまして、機とは法を受ける人間を云ひますが、その機、卽ち各人の心の有樣に應じて、夫々宗敎の心があらはれるやうに說くことであります。

この對機說法に就ての例は澤山ありますが、其中の二、三を申上げ、釋尊がどう云ふ風に人々を敎へ導びかれたかといふことをお話致しませう。

○ 人間は必ず死ぬる者である

或時、キーサ、ゴータミと云ふ女がその可愛い子供を亡くしまして、非常に歎き悲み、方々の醫者のところへ行つて、どうかこの子供の命を元の通り回復させて下さいと云ふて賴んだのであります。しかし、どの醫者も、一度死んだ者は最早助けることは出來ないと、謝絕致しました。ところが或る人が、それならば、自分の師匠の釋尊に賴んだならば、命を與へて下さるだらうから、行つてお賴みなさいと敎へましたので、其の女は喜んで釋尊のところへ來たのであります。すると釋尊は、さうかそれは可哀相だから助けてやらう、それでは私の云ふ藥を持つて來いと云はれたのであります。さうして其藥は芥子の粒である、但し人の死むだことのない家の芥子粒を持つて來る樣に命じられたのであります。キーサ、ゴータミは非常に喜んで方

方の家へ行つて罌粟粒を求めましたけれども、あることはありますが、人の死なない家は一軒も無いので仕方無しに力なく釋尊のところへ歸つて來たのであります。釋尊はどうだ、罌粟粒はあつたかとお尋ねになりますと、彼女は答へて、罌粟粒はありましたが、人の死なない家は一軒もありませんでしたと申しました。すると釋尊は、さうであらう、お前は人間と云ふ者は死なないものと思つて居つたか、人は必ず死ぬものであることを知らなかつたのか、と云つて諄々と生死のことをお話になると、キーサ、ゴータミは豁然として悟つて、遂にその道に入つたといふ話であります。釋尊の教は總てかう云ふ行き方でありました。

○中道に就て

釋尊が第一回の說法に於て、五人のものに向つて說かれました中道とは如何なるものであるかと申しますと、それは八正道と言はれるものであります。即ち、

正見――見は佛教では考を意味するので、正見とはものを正しく考察することであります。

正思――正思惟ともいひまして、自分の思惟を正しくすること。

正語――自分の言葉を正しくすること即ち、嘘を言はないこと、綺言せぬこと、惡口せぬこ

となどであります。

正行――自分の行を正しく、不正なる行をしないこと、即ち廢惡修善であります。

正命――生活を正しくすることで、早く申せば自分の職業に對し、忠實に心を入れてやると云ふことであります。

正精進――目的を遂行するために、努力することであります。

正念――自分の念慮を正しくすることであります。

正定――心を定めることで、散亂する心を散亂しない樣に、安定させることであります。

以上の八つの正しい道を修め、さうして眞實の智慧を得ることが中道であります。釋尊は、この中道を修めることによつて、誰でも一切の苦しみから離れることが出來ると悟られたのでありました。この八正道をずつと後になりまして、三つに分けるやうになつたのでありますが即ち正語、正行、正命、正精進の四つは、道德の範圍に屬するもので、之を戒と申します。次に正念と正定は精神を定めることでありまして、之を定と申します。又正見、正思は正しく見ることと思ふことでありまして、之は智慧のはたらきであります。それを慧と云ふのであります。この戒、定、慧、を三學と申して居るのであります。

○説法の順序

釋尊が其法を人に說かれる場合は、必ず前申しました通りに、對機說法でありますが、しかもそれには大体の順序があつたのであります。卽ち先づ初めに說かるゝのは布施の行であります。彼の人が可哀想だから施こすと云ふ心があれば、最早施こすのでは無いのであります。施こすと云ふのは、施こす者もそれを意としないし、又施こされる者も之を意としないのでなければなりませぬ。やる貰ふと云ふ氣持を持たないのであります。今日この布施の形式は、僧侶の托鉢に見ることが出來るのであります。坊さんが町の眞中を、お經を讀み乍ら歩きますと、施す心のある人は、其鉢の中に物を投げ入れるのであります。先づこの布施の行を修めさせるのであります。この布施の行を修めますと、貪る心が、だん〳〵無くなるのであります。この行がかなり出來、貪る心が緩やかになつてきたと考へられた時に、今度は道德を說かれるのであります。持戒と申しまして、惡いことをしてはいけない、善いことをしなければいけない。つまり廢惡修善の修業をさせられるのであります。さうしてこれが出來てきたと思はれた時に、今度は法の慈悲を說かれたのであります。釋尊の考によりますと、佛になるといふことは、眞實

の智慧を得ることであつて、この智慧を得る爲めには、第一に精神を定めなければならないから、禪定を肝要とする。しかし精神を定めるには、どうしても先づ道德の心が十分でなければならぬから、それで戒を守らなければならぬ。道德が第一であつてそれによつて精神の安定が得られて後、始めて眞實の智慧が得られると云ふ考へ方であります。宗教としての佛教としては、必ずさうでなければならぬと思ひます。

○尊釋の性格

宗教として佛教を理解するに方つて釋尊の言葉を根據とするならば、釋尊は全体、如何なる性格の人であつたかといふことを承知してかゝらねば、佛教と云はるゝものゝ精神を味ふことが出來難いと思ひます。釋尊は天性、非常に慈悲深い、友情に厚い人でありました。さうして極めて冷靜にして、理性に富んだ所謂自克の情念に勝つた人でありました。釋尊が始終云はれて居りますことを考へて見ますと、何時でも、我々が日常やつて居る事柄に就て話をされ、常に自分の感覺によつて貪る樣なことは排折して居られるのであります。又多くの人々を引きつけると申しましても、所謂魅力をもつて人を引きつけると云ふことは、殆ど無つたのでありまして、何時でも認識の力によつて、正しい敎を說かれることによつて、人を引きつけられたの

であります。その教を傳へられるにしても、學術を說いたり、又は教義を說いたり、或は哲學的な話をすることなどは少しもせられなかつたのであります。さうして實際的な事柄を常におぬきになつて居りました。しかし、聞く人の感情や思考などが前と變るやうにと、つとめて說かれたことは確かであります。

斯の如く釋尊は、筋道を立てゝあゝせい斯ふせいと云はれたので無く、銘々の心の相に應じて自から起つて來る宗教の心によつて、導びかれる樣說かれたのでありまして、この點は十分に深く味ふべきであります

○ 宗教は依賴すべきものに非ず

ところが後に至り、いろ〳〵の教義經典などが作られ、それを基礎とする佛教が生れました一例として三部經を主とせる淨土宗に就て申せば　我々人間は凡夫だから、この世界では罪惡ばかりを積み、苦みより脫することが出來ないが、南無阿彌陀佛六字の名號に依つて佛樣は必ず極樂淨土に往生させて下さるぞと云ふ樣に說かれるのでありますが、この教の宗教の意味を窺ふためには、深く自己を顧みねばならぬものであります。

どうせ、この世の中では救はれないならば、幾ら罪惡を犯かしても差支へ無い、佛樣は死ね

ば必ず極樂に往生させるのだからといふやうなことは、固より淨土宗の教ではありませぬが、自己を顧みないで、得手勝手に說教を聞いて、さういふ心持にあるものが多いのであります。又未來は極樂往生すると云ふことも、よく考へて見ますと未來、現在、過去と分れて存在するやうに考へることも　未來は現在の續きであり、現在は過去の續きでありますから、私が今現在と云はうとするのが未來であり、云つた言葉の終る時は既に過去であります。それ故に、現在と云ふ言葉の中には過去も未來も共に含まれて居るのでありますから、未來に往生するといふ教も十分深く味つて行かねばならぬものであります。

（昭和九年十一月十三日講演）

第三席

○因緣の法

釋尊が成道後第一にその法を說かれた相手は、前申しました如くカウンヂニア外四人の者でありましたが、其中にアシユバジツトと云ふものが居りました。そのアシユバジツトが或時市街を托鉢して歩いて居りますところへ、當時拜火教の大家で、弟子が五百人餘りもあつたところの舍利弗（シャリプトラー）といふものが通りかゝりまして道で出會つたのであります。舍利弗はアシユバジツトの態度がいかにも立派であるのを見て非常に感心して、アシユバジツトに向つて『貴方は年は未だお若いやうですが、實に立派な態度を持して居られる、定めし、貴方の先生は立派なお方だと思ふが何と云ふ名前の人ですか』とその師匠の名を尋ねたのであります。アシユバジツトはそれに答へて『自分の先生といふのは釋尊であります』と言ひました。そこで舍利弗は更に『釋尊は貴方がたにどういふことを教へて呉れますか』と尋ねたのであります。アシユバジツトは『私はまだ長く釋尊について居ないのでありますから、釋尊の說かれることが十分には

分りませぬが、自分の學んだところでは、釋尊は世の中の一切のものは、總て因緣に依つて生ずるものであると說かれるのであります』と申したのであります。舍利弗はそれを聞いて大層感心をしまして『私は今迄さういふ敎は、曾て聞いたことが無かつた。世の中の一切のものが因緣に依つて起ると云ふことは誠に新しい貴とい敎である』と言つて非常に喜んだのであります。當時印度に於ては、丁度基督敎の舊約全書に書いてあるやうに、神が世界や人間を造り、さうしてそれを支配するのであると云ふ考を、一般に持つて居つたのであります。ところが因緣の法があつて、すべて原因があつていろ〳〵の結果が出來るものであるといふことを、說かれたのでありますから、舍利弗はそれを聞いて、なるほどさうに違い無いと悟り、直ぐに釋尊の弟子になつたといふことであります。

○十二因緣

この因緣の法と云ふのは、かやうに釋尊が成道せられた時、第一に說かれたものでありまして、我々が現に有するところの一切の苦は、因緣によつて現はれて來るものであるといふことが唱道せられたのであります。人間は年をとつて遂には死ぬものでありまして、これは何人も避けることの出來ない事實でありますが、この死といふことは、我々に取りて苦の一つであり

ます。ところが、我々が死の苦を受けなければならないのは、どういふ原因であるかと申しますと、それは我々がこの世に生れて來た、即ち生を持つたことに原因があるのであります。又生を受けてこの世に生れることも、矢張り何か原因があつて生れたのである。唯漠然と天から降つたのでも無く、地から湧き出たものでもなく、何かそこに原因があることは言ふまでもないことであります。釋尊はこの原因に就て說かれたのでありますが、この敎がずつと後に佛敎が學說となつて、人から人に傳へられる樣になつて十二因緣と名づけられまして、原因を十二の階段に分けて說くことになつたのであります。今之を逆の順に列擧致しますと、次のやうになるのであります。

未來の結果　老死―生―有―取―愛―受―觸―六處―名色―識―行―無明　過去の原因

現在の原因　現在の結果

少しく、これに說明を加へますと、先づ人間が生れてから段々と年をとつて遂に死に至る、これを老死といふのであります。死と云ふことは生れると云ふことから必然的に起る現象であります。更に生は有――有とはあると云ふことでありますが、有に依つて生が起り、有は取に原因して起るのであります。取とは、とるといふことで慾望の爲めに方々を走り廻り、彼是と取り込む事をいふのであります。この取は愛のはたらきに依つて起るものであります。愛とは大

体十五、六歲頃から後に現はれる心のはたらきであります。自分の方へ總て自分に良いものを取り入れて、自分に良くないものを捨てるといふ心のはたらきであります。この愛は受に原因して起るもので、受とは十四、五歲後に現はれる心のはたらきで、自分の苦しい事、苦しくないことを知り、勝手の好いこと、都合の好いことのみを計り、勝手の惡いこと、都合の惡いことは之を避け捨てゝしまはうといふ心のはたらきであります。この受は觸によつて起るもので觸とは身体に物が觸れて感ずる心のはたらきであります。例へば火に觸れると熱いと感じ、水に觸れると冷いと感ずるはたらきがこれであります。これは二、三歲頃になるとこのはたらきが起るものであります。この觸の原因は六處と云つて、耳、目、鼻、口、舌、身体の感覺のはたらきに依るのであります。この觸のはたらきは名色に依つて起るので、名色とは、名は名をいひ、色は物の形をいふのであります。物の名や形が觸の原因となるのであります。この名色の起る原因は識といつて、生れて後感ずる心のはたらきで、今の言葉でいふ意識であります。普通にこれを心と云つて居るのであります。この識の起る原因は行であります。之はずつと過ぎ去つた長い間に、自分等が作つた行爲――(之を佛敎では業と云ひますが)――をいふのであります。過去何千年、何萬年に亘つて爲した行爲――心で思つたこと、口で云つたこと、身体で行つたこと、此等が總て皆業として殘り、之が集つて色々と原因づけるものであります。この行

の原因は無明であつて、我々に智慧の無いことに依るといふのであります。要するに、我々の苦しみの根本は無明に原因して、行となり行よりして識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死といふ風に段々に因緣が相つながつて居る、これを十二因緣といふのであります。さうして更に無明と行の二つを過去の原因と名つけ、之が原因となつて識から受迄のものが起る之を現在の結果と名つけて居ります。次に愛から有迄を現在の原因と名付け、生、老死を未來の結果として考へられるのであります。

○業に就て

此の如く、因緣といふことに就て說くと同時に『業』といふことにも說明を及ぼさねばならぬのでありますが、『業』とは何ぞやといふことを說明致すことは仲々六ケ敷いことであります。今、簡單に申しますと、業とは行爲といふことであります。我々は、口と、身と意の三つをもつていろ〳〵の行爲をなすのであるから、之を身、口、意の三業といふのであります。

釋尊は、我々がこの世の中へ生れて來て、さうして色々な苦みを感んじなければならないのは、過去に於ける業の結果であると申されたのであります。早く申せば、この世に生れてきたことが既にその業の結果だと敎へられて居るのであります。更に又、もつと大きく考へるとき

は、すべて世の中のあらゆるものが皆、業に依つて出來て居るのであるといふことが出來るのであります。言葉を換へて言へば、世の中の事はすべて、因緣によりてあらはれて居るものであると考へて、現に自身の生活にあらはれて居ることに、すべて自身の責任を感ずるところに業と名づけられるのであります。

○業と運命

かやうに業といふのは、我々が過去に於て爲した行爲の結果でありまして、それは全く因緣に依つてあらはれるものであります。我々が身体で何事かをする、これが卽ち一つの業となるのであります。又口で何かいふ、その結果は業となるのであります。心で何か思ふことも皆それが業となるので、その業は絕對に消え去るものではないと說くのであります。我々が一度何か物ごとを考へたならば、その考へたことは絕對に消えるものでない、或は、何か物ごとを言ふと、その言つた事は、もう取消す譯にはゆかないのであります。しかし、この業が我々の精神より離れて、別に獨立して居るものではありませぬ。世に運命と名づけて居るものはそれに反して、我々の心の外に存して、それが我々の生存を司配するとせられて居るのであります ところが、この二つのものを同じ樣な意味に、考へて居る人もあるやうであります。運命とい

ふのは、自分の心の外に別にあるものが、自分の心を支配しやうと考へられるものであります。たとへば、運が悪かつたとか、運が良かつたとかといふ類であります。又何か悲しいこと、又は苦しいことに遭ふと、これは運命だから仕方が無い、といふてあきらめるのであります。

元來、この世の中には、自然の法則といふものがちやんと存在するものでありまして、たとへば夏になれば暑くなり、冬が來れば寒くなるのでありますが、これは人間の力では如何ともすることの出來ないものであります、さういふやうに我々が人力で如何とも出來ないところの現象を指して、運命だと考へるものもあるのであります。しかしながら、釋尊の說かれた業といふのはそれとは全然異なるのであります。釋尊の說かれた業といふのは、全く自分の心のはたらきの因緣に依つて出來るものでありまして、しかもその原因は全く自分の智慧の無いこと、即ち無明なることにあるのであります。云ひ換へますと、過去に於て無明なることによつて、自分が作り上げた結果として業はあらはれるもので、その業をば現在、因緣に依つて相續して居るのであります。自分のしたことでありますから、全部自分が責任を負はねばならぬといふ考であります。全く道德的に自分の心をながめた結果として、さう考へねばならぬのであります。一体私といふものは、どうしてこの世に生れてきたのかと考へる時、色々な疑問が生ずるのであります。親が生んで呉れたから生れてきたといふことは、事實でありますが、しかし親

は我々を生まうと考へて生むわけのものでも無く、又夫婦の間には必ず子供があると限つたわけのものでもありませぬ。

次に又我々は年をとつて、何時か必ず死ぬるのでありますが、何故死なねばならぬかといふことも、考へて分らぬことであります。どうして生れなければならないか、どうして死なゝければならないか、これには深い種——原因がある筈でありまして、釋尊はこれ等は總て因緣によつて生ずるものと說明をされて居りまして、我々の過去に於ける業が結合して、我々はこの世の中に生れてきたのである。どうしても生れなければならない法則のもとに生れたのである。自分といふものが、過去何萬年、何千年の間に作つた身、口、意の三業の因緣に依つて生れ、或は苦み、或は死と云ふことが起つてくると云ふ考方なのであります。

○定業

大行寺信曉といふ人の書いた「山海里」といふ書物の中にこの業といふことに關する實話が載せてありますが、其中に次のやうな意味の話があります。それは或る年の極月の雪降り積る寒夜に、大阪日本橋通りの或處に乞食の親子が居りました。小兒は寢て居つたのでありますが、粥の施行のものが粥をやろ〳〵と呼び來たので、乞食の親はその小兒を呼びさまして茶碗を持

たして粥を貰はしめたのでありますが、寒いために手がこゝへて茶碗を地面に落したのであります。折角貰つた粥が無くなつたばかりでなく、茶碗がこはれたので、親の乞食は痛く小兒を叱つたのであります。小兒はたゞ泣くのみであつたのであります。信曉師はかういふ話を書いて、それを業といふことで說明して居るのであります。乞食の子供がよく寢て居つたのを起されて、粥を貰つたのはよいけれども、折角貰つた粥をひつくり返へして、おまけに茶碗を落して割つてしまつた。さうして親から叱られて、折角の溫い粥も食べずに又寢てしまつたのであるが、これは一休どういふ業。因。のしからしめるところであらうか、まことに哀れなことであるといふのであります。今一つ次のやうな話が載せてあります。それは京都のある座の席へ信曉師が行かれて歸り、丸太町を通つて居ると其座に居つた一人の者が、後から追かけてきて話すのには、只今哀れな者が居つたのを貴方も御覽になつたですか、丁度十四、五歲になる西國巡禮風の娘が一人、母と共に旅に出たが、母は途中で病氣をして死んでしまつた。殘されたその娘は路銀も無くなり、持つて居るものも人に盜られてしまひ、こゝ四、五日の間食物を喰はないと云ふ、哀れな娘がある。そうして乞食をして物を貰つたが、未だ食物は喰べないで居たのであるが、丁度うどん屋が店を出して居つて夜遲くなり、すつかり賣り切れ只一ぜんの賣れ殘りがあつたので之を其哀れな娘にやると、娘はさも嬉しげに食べ、そうして、懷中から金を

出して、こゝに今朝から貰い貯めた金が七、八文あるから之をお代にとつて呉れと云ふ、其うどんやは「否、それには及ばない、之をお前に施しに上げるのだから」と云つたので、娘は禮を云つて立去つたと云ふのであります。この話を聞いて信曉師は、後へ歸つてみたが、もう其姿は見えなかつた。其次の日あるところの座へゆくと、そのところで今朝から町内に行き倒れがあつて、とう〳〵死んでしまつたといふ話、それは昨日よりの寒さの爲めに凍へ死んだと云ふことで、その年頃を聞けば昨夜話をして居つた哀れな娘らしく、死にしとのこと哀れさ不憐さ、定業とは云ひながら、あの曉自分は後を尋ねて居つたけれども遂に會はなかつた。若し昨夜自分に會つて居りなば、どうにかしても斯云ふ可哀相なことはさせまじきに、はる〳〵神信心の爲めに國を出た母娘二人が、いづれも他國に打ち倒れたといふことは、これ前業の致すところであれば仕方がない、といふやうな意味のことが書いてあるのであります。

かういふやうな場合、業といはれるものが一種の運命觀となつて、諦めるといふことをつとめる場合に、用ひられて居るのが多いのであります。元來、この業といふ言葉はずつと古くから印度に行はれて居つたのでありますが、それは運。命。と同じやうな意味のものであつたのを、釋尊はその言葉だけを用ひ、その意味は全然相果したものを說かれたのであります。

○業報は免かれ難し

むかし神戸の近傍の摩耶山の下に、次郎右衛門といふ百姓が住んで居りまして、有難い佛教の信奉者でありました。非常に貧乏の暮しをして居つたのでありますが、毎月一回は必ず京都へ上ぼり、本山へ參詣致して居つたところが、西陣に菱屋良玄と云ふ金持が居りまして、この人も佛教を信じて居り毎日本願寺へお詣りをして居りますところから、何時しか次郎右衛門と親しくなり、遂に法の友となり親交する樣になつたのであります。ところがある時のこと、菱屋良玄が本山へお詣りしますと、何時もなら來る筈の次郎右衛門がどうしたのか參詣しないのであります。そこで良玄はあの人間が來ないといふことは、どうも病氣より外にないと、かう考へましたので、それでは病氣見舞に行かうと下部を一人連れて、摩耶山の下なる次郎右衛門の家を尋ねてやつてきたのであります。するとそこに一軒のひどいあばら家がありまして、周圍には筵をたらした座も無い樣な狹いところで、次郎右衛門は寢て居りました。案の定病氣であつたのであります。次郎右衛門は自分は病氣をして京都へ行くにも行けないで居たが、はる〳〵遠いところやつて來て呉れたと云つて非常に喜んで、法の話をお互にし合つて時を過したのであります。さうして暇を乞ひて別れるとき、菱屋良玄は次郎右衛門に向つて、貴方の宅へ

伺ひ、この有樣を拜見するに誠にお氣の毒である。私はこちらへ來る時、少々の金は用意して持つて居るが、しかし斯云ふことは豫想しなかつたから僅かしか持つて居ないが、之を貴方に差上げるから、せめて障子か何か買つて寒氣が入らない樣しなければ、病氣もよくならないからと云つて金を差出したのであります。すると次郎右衛門は、ひどく憤慨しましていふやうは、貴方は佛法を理解して居られるお方だと考へたから、今日迄親密なお附合を願つて來たが、今そう云ふお話を承はるに於ては今後交際は眞平です。貴方が金を持つて居られると云ふこと、又私が貧乏であると云ふことは、之は自分の業報のしからしめるところで、之は佛と雖も如何ともすることが出來ないことであります。それに貴方がその業報をどうにかしやうとなさるのは、佛法を理解しないやり方でありませうと云つたのであります。

成程人の心の中に入つてみると、金を持たない貧苦な狀態にある人は、不幸にみえても案外安樂に心をもつて居ることもあり、金持で安樂相に見える人でも、心の中へ入ると不安に日を送つて居る人もあることは事實であります。業と云ふものは人の身体を見て云ふものでなく、其心を見るべきものであります。自分の心を自分で見て、幸、不幸を考へる可きで、貧乏でも自分の心が、のんびりと穩かであれば苦しいことではないのであります。之は決して客觀的のものではありません。菱屋良玄は金持であり、次郎右衛門は貧乏でありますから之を可哀相だ

と思つたのでせう。ところが次郎右衛門は自分の業報だからと考へ、自分でどうすることも出來ないことを、貴方がどうすることが出來るものかと云ふことで腹を立てたのであります。菱屋良玄はひどく驚いて、誠に私は過つたことを云つた。成程佛法の精神はそうであつた。お詫びをするから許して貰い度いと云つて、平身低頭して斷りをし、其後又交際を續けたと云ふことであります。

この話にある如く、業の因緣は自分が作つたのである。自分の作つた業を他に讓つてごまかさうとするのは、宗教の精神に反することゝ云ふことに歸着するのであります。

（昭和九年十二月十一日講演）

昭和十年三月八日印刷　講演者御承認濟
昭和十年三月十一日發行　複製不許

編輯兼發行者　大阪市東區今橋三和銀行内　三和佛教會
印刷者　大阪市西區江戸堀下通一丁目　丸和商事株式會社印刷部　代表者　石丸兵内

—【非賣品】—

終

丸善株式會社印刷部印行